

南 方（ニューギニア）

死から見放された記録員 ガ島放

浪戦記

三重県 柳川 隆 二

ガダルカナル島とはソロモン群島の南部にあり、面積は四国の三分の一ぐらいである。中央には背梁山脈が東西に貫き、西側の海岸地帯で、ほぼ中央部に草原と椰子林に囲まれ、飛行場の設営によい場所が見付かった。これがルンガで、我々は約一ヵ月かかって飛行場を完成させたのである。

昭和十七年八月七日、米海兵隊が奇襲上陸、血と汗の結晶である飛行場を奪取された。この攻防を巡り半

年間、死闘を展開したのである。制空海権を奪われ補給路を絶たれた日本軍はみな草の根をかじり、泥水をすする地獄の状態となり、文字通り「餓島」と化した。二万余の犠牲をはらった末に、遂に飛行場奪還ならず、涙をのんで昭和十八年二月撤退した。このガ島戦が米軍反攻の第一歩となり、日本の勝敗を決する天王山となった。

私はガ島上陸、飛行場建設、ジャングルの餓鬼放浪、最後の撤退により、死から見放され、奇跡の生還を得ることが出来た。さらに、経理部見習士官として、末期のフィリピン戦に参加、昭和二十一年末復員したが、最近、この貴重な体験、ガ島の実態を後世に遺すようにとの要請を受け、記憶をたどりながら回想録を記すこととする。

一、第十一設営隊の編成

昭和十六年八月、東京の鉄鋼商社に勤めていた私は、横須賀海軍建築部に記録員(事務)として徴用された。資材部に配属され、ここで前田君と机を並べることになった。この時には、よもや彼と生死を共にすることになるうとは知るよしもなかった。

昭和十七年四月、当時の上司である南吉蔵技手が飛行場設営のため、南方へ派遣される内命があった。それまでに派遣された設営隊はトラック、ラバウル、シंगाポール等比較的平穏な地にあり、それならと若氣の前田君と共に軽い気持ちで参加したのである。

その後、資材係として必需物資の調達に多忙を極めた。物資は横浜山下倉庫に逐次集積され、出港間際にやつと間に合った。その中にイギリス軍から奪い取った、近代土木機械の黎明ともいふべきショベルカーがあったが、巾が広く大発に乗らないので、現地へ持っていけなかった。

五月一日、第十一設営隊編成の発令があった。

隊長、海軍大佐門前鼎、軍人准士官以上九名、

下士官兵二三四名、軍属技師二名、技手七名、

書記一名、隊員一三四二名(ほとんど徴用で従来からの備員は数名にすぎなかったと思われる)合計一五九五名。

軍属は横浜管区の東日本全般より徴用によって集められ、その業種はあらゆる場合を想定して土木、鳶、沖仲士、建築、電気、自動車、鍛冶等各種多様であった。

五月十九日、輸送船「吾妻丸」「北陸丸」「明陽丸」の三隻に乗船した我々は、関係者だけに見送られ、横須賀港、逸見の波止場を万歳万歳の声で離れたのであった。

六月初旬、サイパン経由でトラック島に集結が終わった我々は、ミッドウェイ飛行場設営部隊として「ブラジル丸」その他十数隻と共にミッドウェイへ向かった。日付変更線を越え、明朝には敵前上陸というところまで来たが、我が機動部隊の大敗北となったため、夜半反転、途中に空爆を受けながらも被害無く、トラック島に帰着後編成替えとなった。

同島に滞在中のある日、設営隊の技術幹部数名は飛行艇に便乗、何処かへ飛んだ。帰着後、機上から見ると、飛行場に最適の場所が見付かったので、近々そちらへ行くことになるであろうと。六月二十九日、第十三設営隊と一緒に、何処にあるか知るよしもなく、そのガ島に向かって船団は出発した。

二、ガダルカナル島上陸

昭和十七年七月六日一四・三〇、無事ガダルカナル島ルンガ岬西側に着き、直ちに輸送船の荷役揚陸作業開始、その間、連日B17爆撃機による空襲を受けたが、これが米軍反攻開始への不気味な前兆だとも知らず、被害も軽微で心配していた程のこともないものと、その日の作業に追われていた。

当時、主計科資材係として山の如き資材を各地に分散、格納することが出来た。本来の飛行場設営作業には、上陸後四、五日で着工、二交替制を取りながら炎暑と蚊の大群に耐えつつの作業にも、全員本当によく働いたものと思っている。

ここには我々第十一設営隊（十一設）、第十三設営

隊（十三設、佐世保編成、隊長岡村徳永少佐、一、二二一名）、第八十四警備隊、呉第三特別陸戦隊（二四七名）の諸隊がおり、ルンガ河の東側の椰子林に十一設及び通信班、他はルンガ河の西側に位置し、それぞれ連絡を密にしていた。勇壮な十三設岡村隊長を見るのは毎日で、誰彼なしに声をかけられ元気づけられたのはこの頃であった。

我が十一設の受持ちは長さ八〇〇メートル・巾六〇メートルの滑走路及び誘導路の造成、B17二機ないし七機編隊の連日の爆撃による穴の埋め戻し作業も慣れたもの、苦勞の甲斐あってこれらを一ヵ月で完成、友軍機がいつきてもよい状態であった。

三、米軍反攻のその日

八月七日の前の晩、「上陸してから早や一ヵ月になるな」と親しい仲間と酒盛りを始めぐっすり寝込んでしまった。翌朝、四時前後の薄暗い、朝食の飯上げの始まったころ爆音で眼がさめた。外へ出てみると大艇らしいというだけで、積乱雲がたれこめて機種もわからない。向いのツラギから友軍機が飛んできたのかな

と思つていた。そのうちにいくらも時間はたつていないのに急にドカンドカンと一斉の艦砲射撃が始まつた。「これはえらいことになつた」と付近の防空壕に早速飛び込んだ。

その時、上空には艦載機が無数、椰子林をすれすれに飛び交ひ銃撃を加え爆弾を落とす。また艦砲射撃による砲弾が頭上を飛び越え炸裂する。これらが波状攻撃で身動きが出来ない。

壕には三、四〇名位すし詰めになつて入つていた。

十二時前後であつたが、小便がしたいといつて外に飛び出した誰かがいた。「えらいこつちゃ、沖は船で真っ黒や」素晴らしいながら飛び込んできた。恐る恐る首を出すと沖合が本当にずっと真っ黒になつてゐる。椰子林を通して二、三キロ先の海は敵の艦隊で埋つており、まったく切れ間がないようにおもえた。びつしり集まり合つたその艦は砲身が皆こちらに向かつて盛んに火を吐いてゐる。上陸用舟艇に人やら荷物を降ろしているのがよく見える。

舷々相摩すというこの様は元寇以来のことなりや。

「敵さんの上陸もう直ぐや」「飛行場の裏へ早く逃げろ」「一ペンに出たらやられてしまふ」と時間を若干おいて三々五々に壕から飛び出した。

記録によれば米海兵師団を基幹とするガダルカナル、ツラギ攻略部隊は八十二の艦船と上陸兵力約二万であつた。

付近の幕舎や椰子林が砲弾によって吹き飛ばされ見る影もない。また宿舎の方には人影が全くなく、幸い私どもの宿舎は残つてゐる。当面の食糧をと、加給品のビスケットや乾パン等、食べられる物を手当たり次第麻袋に詰め込んだ。巻脚絆を巻くのもそこそこにして手許にあつた朝食を握り飯にしてほうばつた。

近くにあるトラック置場に行つてみたら自動車班長のS君がいたのでトラックで逃げることにした。だがあわててゐるのか、銃撃をくつたのかエンジンがかからない。ようやく四台目が始動したので、運転席の後の荷台にしがみついた。椰子林で途中仲間を拾いながら飛行場の誘導路に入った。全速で走る自動車のそのスピードの遅いこと。

その時、視界に入った敵機はあちらに四機、こちらに六機と六十数機が数えられた。僅かの地域に超低空で飛び、機上の搭乗員の眼鏡越しの顔がはっきり見える。滑走路に出た。B 25四機編隊が後方よりぐんぐんつこんできた。もう駄目だ、やられたと思つた瞬間、トラックはガクンと急停車、そのまま動かなくなつた。間一髪、敵機の標的から逃れ一番間近なジャングルめがけばらばらに約五〇〇メートルほど走つた。そのとき食糧をトラックに置いてきた。残念だが取りに戻れない。

ジャングルに入るとそこに五、六〇名の仲間がいた。トラックが三台つこんでいたが、二台は銃撃で運転台はメチャメチャ、運転手は血の雨を浴びて死んでいった。負傷者も出ていて悲惨極みなし。

早朝よりひっきりなしに続いた艦砲射撃も空襲も午後四時ごろ止み、急に静けさを取り戻した。本部との連絡もつけようがなく、統制のとれないまま自然にグループ別となって行動をする事になった。

早朝、敵機来襲のときに、誰かが云っていたが、昨

夜まで近所に宿舎をはっていた一五〇名の土人が一人もない。昨夜のうちに逃げたのだ。既に彼らには通報があり、米軍の来襲が昨夜のうちにわかつていたのだ。

だが私達は、この襲来が今後の本格的反攻の第一歩だと考えることもなく、明日にも日本軍が逆上陸して、これら米軍を軽くおっぱらつてくれると信じていた。あの大艦隊を目の辺りに見ながらも負けるなんて考えもしなかつたのである。

四、ジャングル内の飢餓放浪と友軍への脱出

ジャングルの中で夜をむかえた。けれども休むような気持ちの余裕はなく十名位の仲間と共に一歩でも敵の目から逃れるべく奥へ進もうとした。ルンガ河を左岸に渡りジャングルを切り進み、全員切り傷だらけになりながら夜通し歩き、もう大丈夫と川のほとりで夜明より仮眠をとつた。

夕刻、上流へ少し歩いたら、どこか見たような場所に出た。よくみると飛行場のそばで昨夕の渡河点だ。一晩かかって大きく円を描いて徘徊していたわけで、

よく米兵にみつからなかったものだ。太古からの鬱蒼たるジャングルには、名も知らぬ大きな木がところせましと生え、つるがおいしげり、人を寄せつけまいとして目のまえに立ちふさがる。みどりというより黒い色をして一日中太陽の光をよせつけない有様で、これが本当の密林だという怖さを如実に示している。

危険地帯を早く脱出せねばとルンガ河を遡ることにした。川巾が小川になるまで急流の中をのぼった。この間一週間ぐらいだったと思うが、既に三日目位からガ島は「餓島」となって、以後水ばかり飲んで来た。ジャングルであちこちのグループ別の仲間と度々出会った。とにかく水と食料のある所に行かねばならず、上流に向かうものもあれば、また下流へ食を求めて、草原をのり越えジャングルの中をさまよい歩く。

その間、横須賀時代の上司であり、何かにつけて目をかけていただいた南技手以下一五、六名の一行にジャングル内の小径で行き違った。こちらにも一〇名位のグループであった。「柳川も前田も生きていたか、こちらへこないか」と誘いをうけたのであったが、今ま

で苦勞の末、生死の境をさまよった仲間を裏切る訳にもいかないと折角の好意をお断りした。

どちらへいっても生存の確率は全くなく、一瞬の運命はここにすれ違ったのであった。南技手の淋しげな傍が暇より去ることができないのであり、その後二度と逢うことも出来ず、その一行の消息は最後までつかめない。おそらく東部海岸へ出られたか、ジャングルの中で果てられたか、我々以上に悲惨な結果が待ちうけていたに違いない。

またこれと前後して飛行場近くのジャングルをさまよい歩いていたときM君にあった。彼は一旦捕虜となり米軍陣地を見学してきた男である。腹が減って精神状態が朦朧となり、禪を白旗として小枝にくくりつけ米軍に投降したのであった。この飛行場の奥のジャングルには、まだ大ぜいの仲間がいるので投降をすすめてくるといつて、食糧をカバン一杯貰ってうまく逃げたのである。

彼の言によれば、三、四日来より飛行場から離着陸しているあの敵機は、鉄板を一面に敷きつめ忽ちにし

て滑走路を完備し飛び立っていると。また高度の大型土木機械（ブルドーザ等と考えられるが、当時シャベルにモッコ、トロッコ等しか念頭のない私にはピンとこない）を縦横に使用していて工事力、機械力が全く比較にならない。兵員も見たところ相当多く、我が軍の何倍もいる様子。食糧も豊富というより贅沢三昧だと、また我々の住んでいた幕舎もこわれたままでおかれ、彼の知人の日記の手帳をひろってきたとカバンをたたいていた。

とても太刀打ち出来る相手ではないといつてさかんに物量の差、機械力をいって、まるで日本の敗戦を予告するかの言であった。しかしあくまで、神州不滅を教えこまれ、今までの勝ち戦さを知る私には、彼のことを全面的に信じられなかった。米軍給与にありつけぬままに彼と別れたのであったが、その後の彼の消息は知らない。今から考えればこれが私の知った敗戦予告第一号といつてよい。

武器一つない本当の着のまの軍属の身では途中をどう歩いたか記憶にない。さまよい歩くうちに

どのジャングルをさがしても一滴の水がない。本当に喉がやけついて唾も出ない。灼熱の地獄、苦しい。苦しい。

二日半日目にようよう里芋をみつけた。「芋だ」と茎をちぎってしゃぶりついた。ところがこれがシビレ芋とわかった時は遅かった。皆が口中七転八倒の苦しみで、ダブルパンチはひどいものであった。そのうち奥の方へ進むと大木の横たわっている「うつろ」に水のたまっているのをみつけた。落ち葉と共にボーフラがわいている。この水なら大丈夫と、木を叩きボーフラを沈めながら口をつけて呑んだ。結局最後にはボーフラまで呑んで水の有難さがつくづく身にしみた。

海岸線近くの小山に米軍の砲台陣地があった。小径をそつとのほり、樹立の間からうかがうと歩哨が二人坐っているのが見えたので再び後退した。ここより発射した砲弾は、シウルシウルといつて遙か西の彼方でドカンと炸裂するのがよくわかる。その弾着地点が待ちのぞんでいる友軍陣地だとは考えも及ばなかった。

〔後日、寺沢挺身隊が砲台を爆破して軍司令官感状

を授与されたのがこの砲台と思う」

これより二つばかり尾根越えをして小さなジャングルに入った。ここにはチョロチョロした清水が湧いていたので、そこにセブリ（小屋）をつくった。そのときグループは小単位となって前田、大沢と私の三人になっていた。

昼間は危険だということでジャングルにひそみかくれていて、闇夜を利用してそっと海岸線近くの椰子林に這って行き、地面に落ちている「椰子リング」を拾って帰る。

「椰子の実が地面に落ちて芽の出ているやつ、その中を割ると椰子水が変化して、リングのような味のおかふかしたものがある。それを我々の間ではそんな名前でもよんでいた」

そこには米軍の監視哨の櫓があり、昼間米兵がいるので決して油断をしてはならない危険な場所であった。

川の魚を取ったり、トカゲを捕って食べたりするよ
うな、そんな敏捷な生物を捕らえるような体力は既
なく、疲労は極限に達していた。太陽はどんより黄色

となり、小便に行くにも木をつたって休み休みの有様。このままでは幾日を持たず死を待つばかり、せめて塩だけでもとつてみたいと、たった一度だけ一晩かかって椰子林の中を暗闇を利用して、米軍の監視哨の下を匍匐で進み、海岸道路の敵の通信線を引っかけるなど慎重にまたいで、ようやく海岸にたどりついた。幸い見つかることなく、ようやく海水にありつけた。あこがれの塩水を腹一杯にと、たどりついたのに辛くて飲めたものではない。三人で一個の水筒につめてかえるのが関の山。それを水で薄めて椰子碗で少しづつ廻し飲みするのがせめてもの御馳走であった。

この間約二週間、既に胃袋は小さくなり、約六〇キロの体重も半分近くになり、今のアフリカの難民の栄養失調は他人事ではない。あばら骨は洗濯板、脚の関節は杓子、ふとももは軽く両手で廻すと親指が余り、情けない姿の三人衆、これでよく持ちこたえられたのも不可思議としかいえない。

九月十四日の朝だった。ジャングルの中に人の気配がするのであわてて隠れる。しかし近づいてくる足音、

もう逃げ道はない。駄目かと観念する。米兵だとばかり思っていたら、これがうちの兵隊さん、胸にはつきり「第十一設営隊と氏名(氏名失念)」が書かれていた。

「今総攻撃(日本軍の第二陣川口支隊)に失敗したので退つて来たところだ。これからジャングルの中を何里行くのかは知らないけれど、そこに川がある。その川を渡って一里先の海岸に本部があるので行け」と聞かされ、直ちに瘦せこけた身体に鞭打つて、互いに助け合いつつジャングルの中をかきわけ西へ向かつたのである。

途中、曲がりくねつた小径に出合い、これをたよりに川へ出たときは既に夕方になつていた。その谷間にはU. S. Navyと書かれた灰色のドラム缶がごろごろころがつている。昼間まで敵の陣地だったが、やっと追いついたところだ。道理で少し先の海岸近くで小銃音がパチパチとさかんにしている。もう少し元気で歩いたら早く着いて敵の背後より飛び込むところだつた。ここまできて敵の手に捕らえられたら世話ない。ヒヤリとした。

このマタニカウ河を渡り、我が第十一設営隊の兵隊とも出合い、海軍本部にやつとたどりついたら、夜となつていた。本部では主計長から、やつと今、米の補給がついたばかりで、前線へ送る握り飯の一つをたべさせてもらったときには、不覚にも大粒の涙がこぼれた。結局、友軍から遙か離れ、米軍陣地のそばで連絡のとれないままいたわけで、昨夜までいたジャングルはその夜迫撃砲を徹底的に打ち込まれ、その姿は一変したそうである。

その後、一週間位の間に、私達同様に救出された仲間が三々五々と続き救出されたのであったが、大多数の戦友は再び還らざる人となつてしまった。隣の第十三設営隊が人員の掌握よく後退したのに対し、我が第十一設営隊が米軍の上陸地点の正面に位置し、その不意をつかれたために、初期においてかくも多大の犠牲が出たのである。危険をおかしても部下の掌握に全力をつくして、しかる後の撤退であつてほしかったと考える一人である。

この昭和十七年八月七日より九月十四日までの三十

九日間、生命を持ちこたえられたのは、無二の親友であり同僚の前田、大沢の両君とお互いに助け合い、励まし合つて、若き体力と精神力でもちこたえたといえるが、人間の生命力の限界も仲間の救出状態からみて、温暖地にあつても四十五日位といえるのではないかと
思う。天然の要害となつてくれたジャングルに守られ、助けられ、また大いに苦しめられたともいえるのである。

五、第十一設営隊本部の状況

さて米軍の反攻以来、本部はどうしていたか進藤宗一大尉の当時の記録を参考として述べたいと思う。

八月七日、ルンガ岬の十一設、設営地が上陸正面に
当り爆撃、艦砲射撃にてみるかげもなし。部隊本部午前七時、ルンガ河の左岸、西部地区の十三設の近くのジャングル入口付近に撤退せるも掌握人員は僅か、軍属の大半は連絡がとれず飛行場裏のジャングルへ避難したる模様。

八月八日、門前隊長、前夜ルンガ河撤退を決定せる。零時ルンガを出発。○四・三〇マタニカウ河左岸

を第一線防御陣地とさだめ、クルツ岬に中隊本部、ジャングル内に海軍本部を置く。掌握人員、軍人二二〇名、軍属一三六名。

八月九日、敵はマタニカウ河第一線陣地近くに早くも急進撃しきたる模様。

八月十日、一〇・〇〇敵戦車を先頭に約一個小隊、マタニカウ第一線陣地へ攻撃を受く。桜井五郎(兵曹長)小隊よく戦いこれを撤退せしむ。

八月十二日、二〇・三〇敵上陸用舟艇に約三〇名、第一線陣地後方に上陸来襲し來たる。桜井兵曹長自ら先頭に立ち、突撃をくり返し、ついに戦死。またジャングルに避難せる軍属も若干出てきて一七八名となる。

八月十三日、黎明を期して桜井小隊は全員突撃を敢行、これを殲滅する。敵遺棄死体二十二、我が方も小隊長以下戦死多し、軍属もこの戦闘に参加、市川辰雄、岡本福一、金子長吉、小山三治の諸氏、尚食糧既になく他の軍属は甘藷ほりに従事す。

八月十六日、一〇・〇〇敵この日始めて砲撃を開始

す。(ギフ高地山砲陣地より) ユスベランス岬に派遣の見張員を收容し、その無線機でラバウル基地への無線連絡可能となる。

八月十八日、一木支隊ダイボ岬に上陸を知り一同大いに元気づく。この日第八艦隊長官より「マタニカウ河を死守せよ」と公式命令はじめて受理す。

八月十九日、〇五・一〇敵上陸用舟艇九隻、西方コ

カンボナに上陸、味方駆逐艦これに猛射一五・〇〇
〇ルンガ方面に避退して行った。東方マタニカウ

第一線では、前面の敵と交戦中、後方一個小隊迂回、攻撃せるため指旗則清(兵曹長) 小隊この敵に突撃を敢行、突撃三回、この敵を敗走せしむ。

指旗兵曹長以下戦死多数この白兵戦に参加せる軍属、金子長吉(戦死)、市川辰雄、岡本福一、小
山三治、青島勝三、鈴木育造、樋川寅恒、中島友、
芳恒次郎の諸氏。

八月二十日、ルンガ飛行場に敵機十五機はじめて着陸せるを認む。

八月二十七日、〇四・三〇敵上陸用舟艇十五隻、西

方コカンボナに上陸し、東西呼应し挟み撃ちのため、負傷者続出す。二二・一五本部をさらに西方へ移動を始む。ジャングルの行軍困難を極む。

八月二十九日、夕方近く、ようやくボネギ川付近(クサファロング) 移動完了。

八月三十一日、川口支隊主力が島上陸。

その後、小生が海軍本部へたどりついた九月十四日までの消息不明なるも、川口支隊の総攻撃準備と合わせてこの間マタニカウ川第一線陣地の守備は陸軍と交代せるも日時不詳。

六、部隊本部で電話当番

こうして友軍の海軍本部にたどりついた私達は、懐かしい十一設の面々に逢うことが出来たのであった。軍人は百何十名か健在であるのに、軍属は我々のようにジャングル内より出てきたヒョロヒョロ組を合わせてもやはり少ない。六割もおればと思つたが、後方へ物資輸送に出掛けている者もあり、適確な数字は我々には判らない。

先にも記したが軍属の犠牲の多いのは、宿舎の関係

で命令が届かない中に本部は早々撤退行動を起したためである。ジャングル内にいまだと残り残された彼等の安否が心配だ。一人でも多く出てきてほしい。最後のチャンスだ、切に祈った。

その夜半から、折角いただいた握り飯のお陰で腹がしぶって用便に走る。といつても闇の中を手探りでジャングルの木陰にところかまわずしゃがむのである。紙もなく木の葉でふきとる。一晚に何回通ったか記憶にないが朝まで一睡も出来ない。急にかたい飯を食べべてやられたと思いつつ夜をあかした。

朝になってみると、あちこちにアミーバー赤痢に罹った患者ばかり、こんな連中がかりだされて作った握り飯では一たまりもない。やっと助け出されたといつてもこのぞまだ。

こんな状態の十五日の昼頃、主計長から呼び出され「柳川と前田は十三設の本部へ行って電話当番をやらせ。委細は岡村隊長に仰げ」と病人が病人にあらず、一歩でも動けたら健康者だ、敵がそこまで来ている状況では無理のない話だ。

この日、海軍通信隊が本格的に開設されたばかりで、ラバウルとの無線連絡もスムーズになり、敵の状況も刻々と報告出来ることになった。そのため、海岸の見張所、山の見張所よりの有線連絡の受付所となる電話当番であった。岡村隊長のセブリ小屋の一隅で業務開始、二人で二十四時間勤務である。

「B25型機低空にて西に向かう」

「魚雷艇コリ岬沖を海岸線銃撃」

「ツラギ沖の艦船三隻遊弋中サボ島方向に向かう、

艦籍不明」

等、その変化を刻々と報告、その必要あるものは電文にして直ちに通信隊へ連絡、絶対に二人が席をはずすことは許されない。

下痢は続く、だが毎日がひもじい、裏の方で香ばしい臭いがする。出てみるとうちの仲間の一人が海岸から小さな蟹をとってきて焼いている。二、三匹貰って食べたが実にうまい。殻なり食べたら効果てき面、腹をしぼるようにして下痢がひどくなる。血うみがべつとど絶食しなければ死んでしまう。こんな状態が続く

中に陸さんが続々と小屋の前を通過し始めた。

岡部隊の衛生曹長が通られた時、岡村隊長が声をかけられ「下痢で困っているのだが、何か薬をいただけんか」と。凶囊より健胃錠をとりだされ「これしかないのでもよろしかったら」と差し出された。これを服用された時、あそこにも下痢患者がいるのもう一錠やってもらえないかと、お陰で私もおほれを頂戴いたすことができた。

よしどんな事があっても、これで下痢をとめなければあの世行きだ。生水は絶対飲むなど、水筒でわかしながらお絶食を続けた。下痢の回数がとまった。おそろおそろお湯程度から始めて、十日目位に久方振りに便所へ行つた。万歳、すっかりアミーバー赤痢はなおっている。健胃錠かと日頃は馬鹿にしていた私であったが、薬の全くない戦場では実に妙薬である。これからは自己管理に余程慎重にせねばと反省した次第である。

九月下旬のある日、岡村隊長の指示で、超低空で椰子林すれすれに飛ぶ飛行機を撃ち落せということにな

り、兵十名位と我々も小銃を持出し、機体の前方一〇メートル位をめぐけて号令一下の一斉射撃を三回繰り返した。好い気になっていたら直ぐに四機飛んできて、めちやくちやに銃撃され一時間ぐらい窪地にひそんでいた。気がついてみると、ジャングルはすっかり明るくなって、枝葉や土ほこりで誰が誰だか判らない位に泥まみれで白くなっていた。そうしたら隣のジャングルにいた陸軍の方から、危なくてこんなことをされたら被害が出るから絶対してくれろなどと嚴重抗議がきた。これが私にとって米軍に攻撃をかけた唯一の機会であった、以来こういう無茶なことはしなかった。

また、こんなことがあった。ある日、昼間、米軍の艦砲射撃の洗札を受けた。弾着が次第に延びて付近のジャングルに落下し始めた。逃げるひまもない。大樹の幹が張り出していかくれるには丁度よい。あわてて飛び込む瞬間に先客あり、〇〇主計だ、その彼の腹中には砲弾の破片が命中して腹部に鮮血があふれていた。翌朝還らぬ人となつたのであるが、先に飛び込んで安全であるべきはずが、運命とはこんなものである。

だがマラリアでの発熱、下痢、栄養失調で亡くなる
同朋は、毎日数名はある。大勢の中には便利な葬式班
長という適役がいるもので、その役には神官と僧侶の
経験があるというA君が任命され、数人の班員を使っ
て埋葬の毎日にあけくれていた。夕刻水汲みに行った
掃路その彼に会った。「丁度明日で一〇〇名を埋葬し
供養することになるのだが、一〇〇人目は一体誰だろ
うか気がおもしろい」といつていた。その元氣な姿を知っ
ている私には、その彼が一夜明けて冷たくなっていた
のは驚いた。その位、体力の持久力がなく、生ける屍
とはこのことである。

十二月中旬の夜半、真っ黒な闇夜の中を寝っていると、
真上に飛行機が飛んできた。ヒルヒル、シューシュー、
ドカンと寝ている頭の方向の間近かに落下した瞬間も
うだめだ、やられたと思った。だが幸い命はあった。
朝起きてみると五、六メートル先のジャングルが一〇
メートル位の円型で掘れて何も無い。明るくなってい
る。二五〇キロ爆弾だ。破片は遠くまで飛んでいて被
害も出ている模様だが、あまり近くに寝ていたので死

角になり、かえって被弾もなく難を逃れたのである。

七、ガ島撤退作戦

昭和十八年の年も明けて幾日もたっていないある
日、タサファロングのジャングル内にいた我が十一設
にも後方へさがるよう命令がきた。

そして九月、通信隊開設以来、海岸の見張所、山
の見張所と三個所から刻々入る報告をとりまとめ、ラバ
ウル第八艦隊司令部へ送る電文を起案し、隣のセブ
リ小屋で起居の海軍参謀の認可を得て通信隊へ送る電
話業務も相棒の前田君とともにすっかり要領を得て、
簡単なものは参謀の許可なしに適当に電文を送り、後
刻報告すればよいといわれる程になっていた。この業
務も隣の海岸警備隊にすべてをまかせて部隊と行動を
共に退ることになった。

噂によると後方へ移動する陸軍の部隊も相当あるら
しい。海軍では警備隊と通信隊を除いて全部引き上げ
る情報がすぐ入ってくる。まだ一般には命令が届いて
いないが隣のセリブ小屋におられる司令門前大佐、海
軍参謀江村少佐より、遠藤分隊長、軍医長、主計長等

幹部を集めて指示されているのがよくわかる。何か大作戦を起すらしい、このままでは敗退の一途をたどることになる。

増援部隊を一日千秋の思いで待ちわびつつ移動の準備にとりかかる。十月二十四日の総攻撃失敗以来、戦局は膠着状態にあるとはいえず、戦線が後退に後退を重ねて、このタサフロンクに軍司令部がさがって来たということは、敵機の銃撃、爆弾の投下、大砲の弾着地点の延長、魚雷艇の攻撃の激化と敵情を逐次見張所より報告をよせてくるので、この電話業務をしているとよくわかる。決して良い戦況とはいえず戦線の縮少と共に、いよいよ来るべきものが来たと覚悟をあらたに戦慄を覚えた。

ようやくにして後方にさがることになった。物資の輸送の任に当たっていた軍属仲間はユスベランス岬までの道にくわしい。私にとっては初めての行程である。セギロウ、ウマサニ川、ドマ、アルリゴ岬と海岸線に沿って敵の目をかすめながらの夜間だけの行動は、体力的に限界にきている我々には相当にきつい。発熱あ

り、栄養失調ありのひよろひよろ部隊はお互いに助け合い、励まし合って三々五々にユスベランスをめざした。

海岸線に沿って右に海をみながら椰子林を進む。途中軍服を着たまの腐乱死体、毎度見なれたこととはいいながら、誰にも看取られることなく、異郷の地に淋しく朽ち果てた姿が哀れを催す。目といわず口、鼻と顔一面に銀蠅や蟻がたかる。白いウジ虫が人間の肉をむさぼり喰いあらしめている。これが各所での皇軍のなれの果てで異臭が鼻につく、一々かまってもおられない。異様な姿と悪臭に追われながら行軍するより仕方ない。これが我が身の明日の姿だ。誰もが口にこそ出さないが思いは皆同じである。だから落後者にはなりたくない、皆の必死の行軍が続く。

一月二十日過ぎに、どうにか一番西方後部基地であるカミンボに集結出来た我が十一設は、軍人軍属合わせて七十数名までになってしまった。これも大半が病人であり、一応健康者といわれる者はごく僅か、ただ動ける者といったほうが正しい。発熱、栄養失調で明

日は誰が倒れるかわからない、はかない命である。

この時、ガ島撤退作戦命令が出た。第一次撤収輸送が一月三十一日、月齢の暗くなるのを待って実施されると発表あり、駆逐艦二〇隻がルンガ湾に入り、半分は戦闘、半分は部隊収容の予定であるという噂は誰からともなく伝わって来た。だが本当に還れるかどうかは実際に艦が来てくれるまでわからない。撤退なんて今まで聞いたこともない。一日千秋とはこのことか、海軍の救援を待つしかない。

予定が一日延びた二月一日、薄暮と共に乗船の準備にとりかかり余分の装具は小屋に置いて海岸の乗船地点に集合した。予定時刻が来てもなかなか合図がない。そのうち沖合から発火信号あり、乗船区分に従って第一回の小発が出て行く。

我々は第二回目である。やっときた小発には隊長始め軍人幹部、兵隊三〇数名を乗せて出て行く。次の艇に乗って来いよといわれても小発がなかなかこない。

やっこの思いで乗った我々軍属だけ三〇数名舟艇が沖合三、四〇〇メートル出た所で、「駆逐艦は既に動

き出した。今夜はこれで打ち切って帰る」と艇長から告げられた。そして闇夜の中をとぼとぼと重い足を引かずりながら宿舎になっているセブリ小屋に仲間と共にたどりついた。

「いいさ、まだ二次、三次があるからな」と自分自身にいいきかせつつも、もう迎えにこないのかとこれ信じていることも出来なかった。また隊長以下の兵隊が乗った舟艇の者達ははたしてうまく乗艦出来たか、成功を祈りつつも万一帰ってこられるかも知れぬと夜を徹して待っている複雑な一夜であった。

八、軍属は残されるのか

ついに待人来らず、そこには兵と名のる者としてなく、完全に軍属四〇名のみと残された。あわれな姿、最後の最後になっておいてけぼりとはこのことか、考えれば考えるほど眠られぬ夜になり、隣の小屋でもほそ声がする。これは私だけではなかったのであろうか。次の二次撤収はいつのことか。朝になり後藤技手一人が幸い上司として残っておられ、早速相談したが、先ずどこかの部隊の掌握下に入って行動せねば指揮者

がいなくなってしまうのだ。後藤技手を長として基地に連絡をとり、待機の姿勢で終日を過ごした。

二月三日の昼間になって、エスペランスで十三設の指揮下に入れと命令が届いた。エスペランスまで約三里（一二キロ）戻ることになり、途中には小高い丘があり、ここまでは敵機の目を逃れて走りこまねばならない。遮蔽物もない難所であり、寝たつきりになっていく彼等も全員を連れていきたい。途中の犠牲が大きくなるのがわかっているが、何か方法がないものか。だが見捨てて行くことも出来ないし、先夜の軍人の二の舞はしたくない。どうしたものか、困りきってしまった。

その時、後藤技手から

「皆んな聞いてくれ、さつきエスペランスで十三設に入れと命令が出た。あそこまで歩いて行ける者は皆ついてこい。どうしても歩けない者は小屋にのこれ、自由意志にまかせ」

非情であるけれどこれを助けて行動すれば、この半数は倒れてしまうのは目にみえている。そのくらい前

夜の落胆で体力、気力の憔悴はげしく限界に近づいていたのである。結局七名が残ること、いや残されることになったが、どうすることも出来ない。後髪をひかれる思いで我々三十数名は出発したのであった。

二日分の食糧だけ持つて他の装具は全部捨て、本当の身軽になってエスペランスへ向かった。本夕には十三設の指揮下にはいるべく隊伍を組んだのであったが、如何ほども行かぬのに早速落後者が出始めた。これを引っ張り引っ張り助けつつ、もうこれについてこれぬのなら死んでしまうぞとおどかしなだめて、薄暮にかかる頃目的地に到着した。

十三設を探し当て岡村隊長に報告した。この十三設も第一次に帰還予定なるも乗船出来なかつたと残り残され組である。この隊長は九月中旬より約一ヵ月電話当番として同じセブリで起居し、その時アミーバー赤痢にかかつていた隊長と私は陸軍岡部隊の衛生曹長よりもらった「健胃錠」を一錠もらいこれで癒した仲である。

「柳川、いきしとったか、一緒にこい」

と温い言葉をかけられ、その指揮下に入った。

翌二月四日、第二次乗船の日である。最後の夕食をなし薄暮に入って待機の姿勢をとっていた。そこへ陸軍の伝令来たり、

「十一設の柳川はおらぬか、今お前のところの者が一人追及してきたので引き取りに来い」

ジャングルの中をかきわけて本部へ行くと、憔悴しきっている前田だ。だが昨日の姿ではない。昨日カミンポで別れた時は到底歩ける状態でないと思われ、熱発と疲労でうんうんうなつてここまで無理に連れてくると殺してしまうと後藤技手にいわれ、断腸の想いで残して来た彼ではないか、よくもたどりつけたものだ。我々が発した直後、このままではどっちみち死んでしまうと歩き出したとのこと、歩いたというよりはつて歩いたというのが適切かも知れない。

五、六歩歩いては休み、倒れ、人事不省に陥り、一晩中寝ることもなく、どうして歩いたか記憶もなく、ただ四日乗船する我々に会うべく一心で、本当によく頑張つて来てくれたものだ。三里の道を三十時間かか

つてたどりつく離れわざ、ただ気力だけの勝負で人間の本性をみせられた。

「済まん」

ただ一言、手を地についてあやまりたかった。

かかえるようにして待避所へ連れて来た。ここまで来たら意地でも一緒に帰る、頑張れよ。どうしても舟艇から駆逐艦に乗せねばならないが、その様子が全くわからない。若しタラップが降ろしてあるのなら登ることも出来るが、一斉乗船ではそうでもないらしい。

他に適当なロープもなく、巻脚絆で身体をくくりつり上げることにした。先に乗船したものが二、三人力を合わせてつり上げるべく打合わせも済んだ。

やがて時刻も過ぎ暗闇の迫る中を海岸線に出て砂浜に待機した。湿りをおびた砂浜に腰をおろした時、無意識にその砂を一握り胸のポケットに入れたのであった。

〔後日ガ島の砂として仏壇に収め供養の毎日を送つたのであったが、伊勢湾台風に逢い消滅させてしままい取り返しのかかぬことをしてしまった〕

定刻、やがて大発が一隻また一隻と近づいてきた。

乗船の号令が下るや、わあと得体の知れない声があがり舟艇めがけて人の群が襲いかかる。よくもこれだけの底力があったのかと驚くほどで、自然のなりゆきはおそろしい、と肩を組み腰に手を廻して強引に前田君を引っ張って疾走しているつもりだった。舟艇の直前あたりまでくると精魂つきたか彼の足は人形のように棒になって前へ出ない。引きづるようによろめきながらどうやって前進したのかわからないが、舟艇の人となっていた。気がつくると艇は岸を離れてエンジンの音のみしていた。

間もなく大発は駆逐艦の舷側にびたりとつき乗艦に移った。大きな網が舷側にたらしめてあり、これを縄梯子として攀じ登るのである。見上げると二階程の高さであるが、皆に遅れるなどありつた力の力をこめて攀じ登った。

さあ前田の番だ。打ち合わせ通り二、三人で巻脚絆を引っ張り上げる。大発の波のゆれと気があせているためか命の綱は無残にも簡単に切れた。さあ困った。

付近を見廻しても艦上にはロープらしきものはない。

前田、前田と呼ぶだけだ。大発の中ではあつちへひよろひよろ、こちらへひよろひよろしている彼一人の姿が艇底に浮ぶ。他の仲間も全部乗艦したのだ。見るに見かねて艇長と機関士が艇をほつといて助けて下さる。

大発の舷側より駆逐艦の舷側にすりあげるようにしておし上げてくれるのだが、どうしてもとどかない。そこへ水兵さんが二名通りかかったので、「あそこはまだ一人残っております。どうか助けて下さい」と、直ぐ舷側から身をのりだすようにして手をのべて下さる。まだとどかない。波のゆれと共にヤモリのごとく艦に貼りついていた彼は、僅かづつであるがおし上げられる。やっと手がとどいて艦上へ収容出来た時には、すでに発進合図があつたか、スクリュエの回転で周辺は泡立ち白くなっていて、艦は徐々に動きだす。間一髪のところであつた。

最後の最後まで危機の連続であり、ひや汗ものばかりであるが強運の持主として彼はもちこたえたのである。

る。思わず彼を抱いて甲板上にへたりこんだ。ようやく氣をとり戻した時には既にガ島の島影を見ることが出来なかった。

舳先からの波しぶきは二階よりも高く、全速で進む駆逐艦上で興奮で眠れぬ夜をあかしたのであった。

翌朝昼前ショートランドで艦を降りた時に「浜風」とその文字をみ、その勇姿を見たのであった。その決死の行為に感謝あるのみである。その後、二月七日の三次輸送も完全撤収に成功、カミンボに残った彼等も全員無事収容されたと聞き、やっと安堵したのであった。

ラバウルに着き、その内六割が入院することになり、ここで彼と別れたのであった。パラオを経由して三ヵ月後の五月二十一日、内地の土を踏むことができたのであった。

ただ、惜しむらくはパラオ入港の前日、あれほど元氣であった後藤技手が急に亡くなられたのはかえすがえすも残念でたまらない。

こうして後藤技手の白木の位牌を先頭にして、三百

余名の遺品と共に横須賀にたどりついたのであった。

振り返ってみると、我が十一設の隊員は尊き多大の犠牲を払いつつも、当初の飛行場の設営、米軍の上陸を正面に受け部隊の掌握も困難な状況下で軍属の大半がばらばらとなり、ようやくにして米軍との戦闘体形を整え、夜襲に対しては苦戦の末撃退すること両三度に及んだ。友軍の来援ありたるときは既にその様相は餓鳥と化していたのであったが、その後持ち永らえて最後の撤退に到るまで、その経過を語ることの出来るのは我々をおいて他にない。

しかもその間、一日として離れることなく行動を共にしていた前田君との二人三脚は、ようやくにして最終日までもちこたえられたのであった。お互いに生き永らえてのガ島生活には本性をむきだしてのつきあいだ、どん底までさらいあい、その間、迷惑やら励まし

の連続で、彼なしでは今日の私はありえない。私のガ島戦記は彼への感謝と懺悔であり、如何にして助け合ったかの共同生活の尊さの記録である。

【解 説】

執筆者柳川隆二氏は若い記録員とし、はからずもガ島から生還されたが、昭和十九年経理部見習士官として渡比、昭和二十一年内地帰還する間、海軍軍属、陸軍軍人として貴重な経験をされた。しかし、ガ島撤退の時、軍人優先、軍属は最後に乗船と言われた。また、ガ島戦を顧みて、1. 情報収集力の差、2. 地図作成に対しての協力度の差、3. 建設機械力の差、物量の差を強調された。「敵も知らず、己も知らねば、百戦ごとく危し」である。

筆者は「戦略、戦術の初歩的誤り」として、「敵情判断の甘さ、逐次戦闘加入の過ち」と言われたが、これについて、ガ島戦八ヵ月間に、投入された戦力と、各部隊の編成について記してみたい。

ガ島に設営隊が上陸したのは昭和十七年七月である。軍属、工員等を主とした部隊で戦闘部隊ではなく、しかも、陸軍とは関係なかった飛行場建設部隊である。一ヵ月後、予期せぬ米軍の大部隊の上陸であった。

これに対し大本営は一個大隊もあれば撃破出来るだ

ろうと、一木支隊を上陸させ、先遣隊は一夜にして潰滅した（支隊の編成後記）。続いて十日後の八月二十九日、川口支隊（後記）その他を増援開始、九月十四日、支隊の攻撃不成功（兵力一個連隊）。十五日、日本軍は千百名を揚陸した。

三回の上陸部隊は不成功になると次の部隊、次の部隊で、逐次戦闘加入の愚を敢てしている。十月上旬より、本格的に第二師団が上陸開始、戦力整わざるに逐次戦闘加入、第十七軍司令官のガ島上陸後も戦局好転せず、十月二十四、二十五日、第二師団主力の総攻撃も失敗した。その間、八月八日、第一次ソロモン海戦、二十四日、第二次ソロモン海戦、十月十一日、サボ沖海戦、十三日、連合艦隊戦艦二隻ガ島飛行場砲撃、二十六日、南太平洋海戦。

十一月二日、日本軍六〇〇名ガ島増援。五日、連合軍、ガ島増強、十日、第三十八師団（沼）司令部及第二二八連隊ガ島上陸、十二、十三日、第三次ソロモン海戦、十三、十五日、第二二九連隊輸送失敗、二十九、三十日、ルンガ沖夜戦、十二月、御前会議でガ島撤収

決定、十八年一月二十九日、レンネル島沖海戦、二月一日、イサベル島沖海戦、一日〜七日、三次にわたり撤退（計一三〇五〇名）ガ島戦死・戦病死・行方不明計二二〇〇名

逐次戦闘加入した部隊編成表

第十七軍（沖） 軍司令官 中将百武晴吉

海軍部隊

第十一設営隊、海軍大佐門前鼎

第十三設営隊 海軍少佐岡村徳長、ガダルカナル

守備隊、第八根拠地隊 海軍中佐遠藤 幸雄

陸軍部隊

一木支隊・歩兵第二十八連隊（第七師団）一個大隊（四個中隊、機関銃・連隊砲・速射砲・工兵・通信中隊、大隊砲小隊、独立速射砲中隊）支隊長 第二十八連隊長 陸軍大佐 一木清直。

川口支隊・少将川口清健、歩兵第一二四連隊、少将岡明三助（三個大隊の完全一個連隊 編成）。

第二師団、師団長 陸軍中将丸山政男、第二歩兵团長少将那須弓雄、歩兵第四連隊、歩兵第二三〇

連隊（第三十八師団）、歩兵第十六連隊、野砲兵、工兵、輜重兵各第二連隊、通信隊。

野戦重砲兵第四連隊、野重一個中隊、独立速射砲二個大隊、独立臼砲第一連隊一部、戦車第八連隊、独立山砲第十、第十九連隊、野戦高射砲二個大隊、独立自動車大隊、無線小隊三個小隊、患者輸送隊本部。第二十八師団 師団長 陸軍中将佐野忠義、第三十八歩兵团長 少将伊藤武夫 歩兵第二二八連隊、歩兵第二二九連隊、（十二月十二日一空襲により六隻沈没、一隻大破、四隻のみガ島上陸、約四百名が後半戦に参加）

矢野部隊、三個中隊、機関銃・山砲各一個中隊（約七百名、二三〇連隊麾下、撤収作戦の殿軍を受け持つ）。